

聖書：使徒 13：13～41

説教題：罪の赦しと義認の福音

日時：2014年1月12日

パウロとバルナバは、聖霊に導かれて、第一次世界伝道旅行に出発しました。まずキプロス島で宣教を行ない、今日の箇所です。小アジア（今日のトルコ）のベルガへと渡ります。そしてピシディアのアンテオケに行った時のことが記されます。パウロとバルナバが安息日に会堂に入ると、聖書の朗読がなされた後、どうぞ奨励の言葉があったらお話してください、と頼まれます。ここに初めて使徒の働きにおけるパウロの説教が記されます。そういう目で見ると、今日はちょっと長いな～と思われた箇所も俄然興味がわいて来ます。このパウロの説教は三つの部分からなっています。その区別のしるしとなるのは聴衆に対する呼びかけです。最初の段落は16節の「イスラエルの人たち、ならびに神を恐れかしこむ方々。よく聞いてください。」で始まり、二つ目の段落は26節の「兄弟の方々、アブラハムの子孫の方々、ならびに皆さんの中で神を恐れかしこむ方々。」で始まり、三つ目は38節の「ですから、兄弟たち。」という呼びかけで始まります。この区分に沿って見て行きたいと思います。

まず第一の区分ではイスラエルの歴史が回顧されています。パウロはここで、父祖たちの選び、エジプトでの滞在、その間にイスラエルが大きくなったこと、出エジプト、40年間の荒野の放浪、カナンにおける7つの民との戦い、そして土地の相続分配のことにまず触れます。その後、さばき人すなわち士師記の時代、そして王の時代（初代王サウル、二代目の王ダビデ）のことが触られています。そしてそこから一気にダビデの子孫であるイエス・キリストへと飛んでいます。その際にはメシヤの先駆者であるバプテスマのヨハネのことも触られています。果たしてこの振り返りにはどんな意味があるのでしょうか。

まず私たちがここに見ることは、これは決してダラダラと歴史を振り返ったものではないということです。注目すべきは各文章の主語です。17節を見ると、「この民イスラエルの神は」と始まっています。すなわち主語は神です。18節はどうでしょう。約40年間、荒野で彼らを導かれたのは神です。19節でカナンで7つの民を滅ぼし、その地を相続財産として分配されたのも神です。その後のさばき人を遣わしたのも神。キスの子サウロを与え、ついにはダビデを王として立てたのも神。つまりパウロは神が導いてくださった歴史としてこれを語っているのです。特にパウロは神の恵み深い導きに焦点を当てています。

そしてこのことと関係するもう一つのポイントは、このような旧約の歴史が目指す焦点はイエス・キリストであるということです。ダビデから一気にキリストへと話が飛んで、私たちはちょっと飛び過ぎではないかと思ったかもしれません。しかしこのことは、イエス・キリストこそ、これらの歴史が指し示す焦点なのだということを教えてくれます。旧約の歴史とは、ただの歴史的事実の羅列としての歴史ではなく、キリストを待ち望み、キリストへと集中して行く歴史です。ですから私たちは旧約聖書をキリストと無関係に読むことはできません。旧約のどこを読んでもキリストとのつながりがあるように、キリストに至るように、キリストに救いを見出すものとして読む必要があるということになります。

二つ目の段落は26～37節です。ここではイスラエルの歴史の焦点であるイエス・キリスト

のことが語られています。果たして旧約時代を通してずっと待ち望まれ、ついに現れたキリストは地上でどう歩まれたのでしょうか。27 節を見ると、人々と指導者はこのイエスを認めず、旧約の言葉を理解せず、イエスを罪に定めて、十字架刑によって殺したということが語られます。そしてなきがらを墓の中に収めた。一体これのどこが救い主なのかと思われるような姿です。しかしパウロはこの方こそ、神が送りたいもう救い主であることを二つの点から証明しています。

一つは、このイエスの十字架と葬りは前から預言されていた、ということです。27 節：「その預言を成就させてしまいました」。29 節：「こうして、イエスについて書いてあることを全部成し終えて後」。旧約聖書には確かに、やがて来られるメシヤは受難のメシヤであること、民の罪を背負っていのちをも差し出す救い主であることが、イザヤ書 53 章などに預言されていました。これは神秘的なことです！イエス様を罪に定めた人たちは、自分たちの思いでそのことをしました。これでイエスを除ける、これでイエスなんかメシヤでないことを証明してやった、と思っていました。ところがそのことによって聖書の預言が成就し、かえってイエスが神のメシヤであることが証明されることになったのです。

そしてもう一つ、パウロが述べているのは復活です。30 節：「しかし、神はこの方を死者の中からよみがえらせたのです。」これはどういう意味を持つことでしょうか。それは一言で言えば、人間の判決に対する神の逆転判決です。人間はイエスを罪ありと定めて死に至らせましたが、神はそうでないと言って、それをひっくり返された。これははっきりとした証明です。31 節にあるように、イエス様は何日にも渡り、現れました。イエス様を見た生き証人は当時たくさんいました。I コリント 15 章によれば、500 人以上の兄弟たちに同時に現れたこともありました。またこの復活についても、旧約聖書でずっと前から預言されていました。パウロは 33 節以降で旧約聖書から三つの言葉を引用します。33 節では詩篇 2 篇 7 節、34 節ではイザヤ書 55 章 3 節、35 節では詩篇 16 篇 10 節を引用しています。ただ十字架の死だけを見るなら、このどこが救い主なのかと思われたかもしれませんが、神はこのように復活によってイエスこそ、ご自身が約束し、ついに遣わしたもう救い主であることをはっきりと示されたのです。

以上の事実に基づいて、パウロは三つ目の段落である 38～41 節で、みことばを聞いた人々への適用を語ります。まず 38 節で述べていることは「罪の赦し」です。「罪」という時、私たちがまず考えるべきは、神に対する罪です。ルカの福音書 15 章に出て来る放蕩息子とは、我に返った時、何と言ったのでしょうか。「お父さん。私は天に対して罪を犯し、またあなたの前に罪を犯しました。」と言いました。彼が実際にしたことは、お父さんに対する悪ですが、それ以前に天に対して、すなわち神に対して罪を犯したと彼は言っています。ですから私たちもたとえば誰かのものを盗んだり、誰かの名誉を棄損したなら、ただその人に謝り、償いをし、和解すれば終わりではないのです。神の前で正しく歩まなかったという罪は残っているのです。また人間関係における罪だけではなく、私たちは一人である時も、神の前における行動あるいは思いにおいて罪を犯すことができますし、また犯しています。神はすべてを見通される方であって、一つもごまかされない方。言い抜けなど不可能なお方。その方の前で私たちは最後の日に弁明しなければならぬのです。それは何と恐ろしい将来と言うべきでしょうか。

先週は川崎で逃走した容疑者のニュースがテレビで流れましたが、その人がだんだん追い詰

められて行く様子を見て、神の御前における罪も同じだと思いました。彼は逃げる中でどんな心境だったのでしょうか。逃走中、このまま本当に逃げ切ることができるのではないかと、という思いを持った時もあったでしょう。ところが彼は全国に指名手配され、一人の彼に対して警察官が三日間で1万7千人も動員され、もはや隠れ通すことはできず、結局逮捕されました。私たちには良心があります。悪を行なうと、誰も見ていなくても、「お前は正しくないことをした」と責める声が聞こえます。これは神が私たちの心に埋め込まれたものです。私たちはその信号を無視し、忘れ去ろうと努力しますが、事あるごとにそれは思い出されて、私たちを責めます。確かに私たちは良心を鈍くすることも可能です。さばきなどないのだと自分に言い聞かせ、自分勝手な希望を抱くことも可能です。しかし逃走した容疑者は、その淡い期待を打ち破られ、最後は捕まえられてしまった。そしてこれからすべてが詳細に調べられ、ふさわしい報いをその身に受けることになるわけです。

しかしもしそんな状態にある私たちに「赦し」が提供されたらどうでしょうか。それは何という信じがたい、またこれ以上ないありがたいニュースでしょうか！でもどうしてそんなことがあり得るのでしょうか。それは先ほど見たイエス様の生涯に答えがあります。イエス様は罪のない方なのに十字架につけられました。神は前もって、そのことを旧約聖書に預言しておられました。なぜ神は罪のない方がこのようにされることを御心とされたのでしょうか。それはこのイエス様によって私たちに罪の赦しを提供するためです。ヘブル書9章22節：「血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。」罪のないイエス様の十字架の死は、私たちの罪の赦しのために神が取ってくださった唯一の方法でした。それが私たち罪人の前に差し出されている。これは私たちにとって何という救い、何という祝福でしょうか！

39節ではもう一つのことを言われています。39節の「解放」という言葉には印がついていて、欄外の注に「義と認められる」とあります。律法は神の御心が記された正しい基準で、それ自身良いものですが、それは私たちに対しては私たちを告発するだけです。誰もこの基準をパスできません。そしてこれをパスしなければ、私たちは神から何の祝福も与えられません。ところが私たちは律法によってさばかれないばかりか、何と「義と認められる」ということがここに言われています。キリストが人として地上で全うした完全な義の生活が、私たちのものとしてカウントされるのです。それによって私たちは本当は罪人なのに、あたかも一度も罪を犯したことがない者であるかのように神に見られるのです。そういう者として、私は神との豊かな交わり、神からの豊かな祝福、そして永遠に祝された命に歩む者とさせられるのです。

これはどうしたら私のものになるのでしょうか。39節に「信じる者はみな」とあります。これが、神の救いを自分のものとするただ一つの条件です。私たちは果たして、この招きにどのような態度を取るのでしょうか。神のしてくださったことはありがたいが、私はそこまでして頂かなくても、まあ大丈夫だろうと思うのでしょうか。それとも私たちはこの救いは私にどうしても必要なものだと思うのでしょうか。その人はただこのイエス様を信じ、すがるだけで良いのです。それによってこの祝福はその人のものになるのです。

最後40～41節でパウロは、この福音を受け入れない人への警告を語ります。「ですから、預言者に言われているような事が、あなたがたの上に起こらないように気をつけなさい。」そうしてハバクク1章5節を引用します。これはイスラエルをさばくことになる異国の民が隆盛

を極めることについての預言です。思わぬ仕方でも神のさばきがあなたがたの上に臨む、と。そして実際それは現実に起こりました。神の恵みを軽んじ、拒絶しているなら、最終的にはこのようなさばきが臨む。かつて起こったこれらのさばきは、最後の究極的なさばきを指し示すものです。そのことが、この言葉を見無視し、退けることによって、あなたがたの上に起こらないようにせよ！とパウロは訴えています。

神は長い歴史をかけて証しし、復活によってはっきりと示したメシヤなるイエス様によって、「罪の赦し」を私たちに提供してくださっています。またこの方の律法にかなう完全な義の生涯によって、私たちに「義と認める」祝福を差し出してくださっています。私たちは自分の力でこれらの祝福を得ることはできません。自らの救いの必要性を認めて、このイエス様により頼み、イエス様を信じる者に、神はただ恵みによって、この「罪の赦し」と「義認」の祝福を与えてくださるのです。